

埴輪はなぜ立てられたのか

市内の古墳を発掘調査すると、しばしば埴輪が出土します。埴輪は土管状の円筒埴輪と、人、動物、武器、家などを表現した形象埴輪が大きく分けられます。一般的には形象埴輪がよく知られていますが、古墳から出土する埴輪の大半は円筒埴輪です。

円筒埴輪は、古墳の墳裾部や墳丘上、中堤上、周溝の外側などに、古墳を取り囲むように列状に並べて立てられることが一般的で、聖域を区画するために立てられたと推測されています。要所につきばを上に乗せた姿を表現した朝顔形円筒埴輪が立てられることもあります。大型の古墳には大型で背丈の高い円筒埴輪が、小型の古墳には小型で背丈の低い円筒埴輪が立てられています。



女子人物埴輪(酒巻14号墳)

円筒埴輪(若小玉古墳群)

市内に古墳が築かれ始めた5世紀後半の円筒埴輪は、安定の良いずんどう型のスタイルでしたが、時代が下るとともに、下部を地中に埋め込みやすい底部がすぼまる細身なスタイルに形態は変化していきます。

形象埴輪は、円筒埴輪と同様な位置に立てられますが、一部分にまとまって立てられることが一般的です。市内で出土した形象埴輪は、武人、力士、みこ、琴弾き、馬引きなどの人物埴輪、馬、犬、鹿、水鳥などの動物埴輪、太刀、靱、靱、盾、甲冑、きぬがさ、家などの器財埴輪に分けられます。人物埴輪は身分の違いが大ききで表されており、身分の高い人物は背丈が高く、二本の足も造形表現されています。それに対して身分の低い人物は、足の部分が省略されて円筒埴輪と同様に筒状に造形表現されており、背丈も低くなります。女性の埴輪で二本の足が造形表現されている埴輪はまれで、二本足で直立する背丈の高い埴輪は存在しないことから、当時は相対的に男性上位の社会であったと推測されています。

形象埴輪は、「日本書紀」垂仁紀の記述から殉葬の代わりに立てられたとする説がありますが、考古学的には否定されており、何のために立てられたかについてはいまだに明らかではありません。一団となつて何らかの場面を表現していると思われるですが、古墳によって構成や配列はさまざまで、その普遍的な意味を見出すことは難しいのが現状です。

(文化財保護課 中島洋一)



このコーナーでは、行田の歴史や名所、名物などを行田ゼリーフライキャラクターのこぜにちゃんが分かりやすく紹介します。



観福寺(南河原地内)境内の覆屋にある2基の大型板碑。この板碑は鎌倉時代中期に造られたもので、昭和3年に「南河原石塔婆」として国の史跡に指定されているよ。

板碑は主に供養塔として造られたもので、この板碑は源氏と平氏との戦いで活躍し、戦死した「河原太郎高直・次郎忠家兄弟」の供養塔ではないかという言い伝えもあるんだ。

板碑の中でも、国の史跡に指定されているのは全国的に珍しいというから、ぜひ見に来てくださいね。

今月の表紙

2月3日、行田八幡神社で節分祭が開催されました。「鬼は外、福は内」という掛け声とともに、はかま姿の年男・年女や忍城おもてなし甲冑隊が無病息災の願いが込められた福豆をまくと、参拝者らは両手を精いっぱい伸ばして受け取っていました。

■市報ぎょうだに掲載されているあなたの写真を差し上げます。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当(内線318)まで。

■市民の皆さんの市政に対するご意見をお待ちしています。

■市報をCD-Rに録音したものを希望者宅にお届けします。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当(内線318)までご連絡ください。

